



生源寺眞一著

『新版 よくわかる

食と農のはなし』

「農業の研究に携わること30年あまり。振り返って、経済学のロジックと農業・農村の実相のあいだを木の葉のように漂い続けてきたような気がする。…皆さんと一緒に考えるための素材をいくらかでも提供できれば、筆者としては満足である」と著者自身が“あとがき”で語っているように、本書には“考えるための素材”が満ちている。1993年から2009年にかけて著者が雑誌・新聞等に掲載した52編のトピックス的な論稿をテーマごとに組み直してまとめたものであるが、取り上げられているテーマは食の量の確保と質の問題、農地制度、農政改革、米政策、中山間地域問題、都市と農村、環境保全、農業経済学の本領など多岐にわたっている。

文章のトーンは全体的に抑制されており、自説を声高に主張することはない。優れたバランス感覚を基調に、論調は謙虚で、慎み深い。しかし、静かな語り口のなかに読者は農業経済学者としての著者の筋金のような自負と農業・農村政策のあり方についての確固とした信念をそこかしこに見出すであろう。

たとえば、著者は、農業・農村は農家だけのものではない、国民共有の財産である。農地も一面では私的な資産であるけれども一面では公共性の高い財である。歴史的に多額の財政負担によって形成された土地改

良ストックはなかば公的な資本でもある、と説く。また、農政改革の照準は、将来の農業・農村を支える熱意をもった世代に当てるべきであり、農地所有者といえども意欲と能力を失ったものに農地をまかせてはならないと語る。主張は、これまで安定状態にあった兼業稻作が、昭和一けた世代のリタイアとともに、持続性を急速に失いつつある農村の実状を踏まえた見解であり、決して安定兼業農家を否定しているわけではない。

最終章「農村のかたち」では、著者は農村コミュニティの今日的意義を力説している。農村社会に継承されているルールや合意形成力は無形の地域資源であり、土地や水にかかわる伝統的な地域資源保全のスタイルには、今日の社会にも通用する合理性が存在すると語る。こうした伝承型の知恵と地域の自然環境が相まって、地方色豊かな文化が形成されているとし、このような人的なつながりと、そのもとで醸成される行動規範や相互信頼を、“農村コミュニティの力”と表現している。そして、“コミュニティによって再生産される農村地域資源”と“市場経済との不断の交渉のもとにある農業経営”という日本農業の実相を踏まえ、伝統的な要素を継承しながら、新しい経済社会の技術とニーズに適合していく日本農業の姿に、「歴史の重層的な進行のひとつのモデル」を著者は見ているのであり、そこに農業・農村の明日と日本社会の進路を重ね合わせて展望しているように思われる。

食と農にかかわる難題を平易に語ってくれる良書である。

家の光協会 2009年6月

1,575円(税込)223頁

(常務取締役 鈴木利徳・すずきとしのり)